様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０２２

研究課題名（和文）日本と韓国の小学校教員への調査に基づく小学校英語教員研修カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of a training curriculum for primary school English teacher based on the investigation to incumbent teachers in Japan and Korea

研究代表者
金　ヒョンスク（KIM, Hyun-sook）

聖徳大学・児童学部・講師

研究者番号：９０５２４８７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国際化に対応できる小学校外国語カリキュラムで必要とされる教員の資質と能力を、日本と韓国の現職小学校教員への調査を通して明らかにし、小学校英語教員研修のカリキュラム開発を試みた。調査研究を通して、教員の英語力の面では韓国の方が高いが、研修希望の内容としては両国とも海外研修や異文化体験、英会話を望んでいた。教員側からみた小学校英語学習の効果は、非言語的な部分や異文化学習の面が高かった。異文化の要素を基礎にしたカリキュラム開発が必要である。

研究成果の概要（英文）：Through the investigation to incumbent primary school English teachers in Japan and Korea, I clarified qualities and abilities of teachers needed to the primary school foreign language curriculum responding globalization, and developed a curriculum for the teacher training.
Teacher's English proficiency was higher in Korea, however, they pointed out overseas training, intercultural experience and English conversation would fulfill desire for their personal development in both countries. As for the effect of the primary school English on the part of teacher, an aspect of a nonverbal part and intercultural learning was underscored. It is necessary to develop a curriculum reflecting intercultural element.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：国際化　教員の資質・能力　小学校教員への調査　日韓の比較　異文化学習　言語村　小学校英語教員研修カリキュラム開発

１．研究開始当初の背景

近年日本と韓国では、国際化に対応するための外国語カリキュラムの改革が行われてきた。日本では 2002 年度から小学校の総合的な学習の時間において国際理解の一環として外国語会話が導入され、2008 年 3 月に告示された小学校学習指導要領の改訂では、小学校 5・6 年で週 1 コマ「外国語活動」が実施されることになった。さらに、文部科学省が 2013 年 5 月 28 日に公表した教育再生実行会議第 3 次提言の中に、小学校英語を教科化する方針を盛り込んで、「教科に変更するとともに、授業数の増加や実施学年の早期化」などの検討を求めている。

一方、韓国では 97 年度から正式に教科として小学校 3 年から週 2 時間の英語教育が実施されてきた。さらに、2006 年度 9 月からは小学校 1、2 年生からの英語教育が実験的に行われたが、世論の反対で実現できず、2009 年度から小学校 5 年生から時数を週 3 時間に増やすことになった。また、2012 年から実施されている「国家英語能力評価試験」に、話すこと、英作文が導入されることで、小学校英語はコミュニケーションからリーディング中心へと大きく方向転換をしている。

国際化に対応できる外国語教育を目指している両国の小学校英語カリキュラムをめぐる政策の差は、カリキュラム効果にどのように反映されているのだろうか。両国の教員の意識面への影響に関する先行研究を概観すると、バトラー後藤（2005、189 頁）は、小学校で英語を教える教員を対象にどのような資質が重要なのかを尋ねた調査の結果、両国の教師の認識に差がみられたという（バトラー後藤裕子（2005）『日本の小学校英語を考える　アジアの視点からの検証と提言』三省堂）。韓国の教師は、言語的スキルを指導できる能力と視聴覚教材を使いこなせるスキルを重視している反面、日本の教師は、文化的なものやパーソナリティを重要な資質として捉えている。両国のカリキュラムの違いが教師の認識にもはっきりと表れている。

それでは、国際語としての小学校英語を教えるときに、教員の指導力にはどのような課題があり、どのような教員研修の充実が必要だろうか。本研究では、両国の小学校英語教員の能力・資質に注目する。その理由は、両国がアジアでの EFL（English as a Foreign Language）の環境にありながら、言語構造的に英語を習うことが難しい国であること、文化的にも単一文化の色彩が強い国という共通の背景をもっているにも関わらず、異なる導入の仕方で小学校英語を始めているからである。両国の小学校教員がどのような能力と資質を持っているのか質問紙調査を通して把握した上で、それを小学校教員研修内容と関連づけて分析し、教員研修カリキュラムの開発を試みることは両国にとって有益だろう。

国際語としての小学校英語を教えるときに、教員にはどのような力が必要だろうか。そのためには、まず、韓国と日本の小学校教員がどのような能力と資質を持っているのかを把握した上で、それを小学校英語カリキュラムの特徴および教員研修内容と関連づけて分析する。

２．研究の目的

研究の目的は、国際化に対応できる小学校外国語カリキュラムで必要とされる教員の資質と能力を、日本と韓国の現職小学校教員への調査を通して明らかにし、小学校英語教員研修のカリキュラム開発を試みることである。

３．研究の方法

（1）日本と韓国の小学校英語教員研修に関する文献研究、（2）日本と韓国の小学校英語教員研修に関する実態調査、（3）日本と韓国

の小学校英語教員への質問紙調査とその分析・インタビュー調査の実施、（4）アメリカミネソタ州の「Concordia Language Villages」の現地調査を行った。

４．研究成果

（１）まず、日本と韓国の小学校英語教員研修に関する文献の収集・分析を行い、国際化に対応した小学校英語カリキュラムのあり方を実現するためには、教員がどのような能力、資質を持つべきかを理論的に検討した。次に、現地調査としては、小学校英語教員研修に関する実態調査として、韓国初等英語教育学会の主催で行われた国際学術大会（2012年1月14日、韓国 Pusan 教育大学）に参加し、現在の韓国小学校英語教育の動向及び教員研修の現状や課題について情報を収集した。その結果、韓国の場合、97年以降小学校英語教育の政策が短い期間で多様に変わっているため、導入初期に長期間受けた教員研修の内容が、現在の小学校英語教育では活かされてなく、新たな資質が要求されて現場の教員が大変戸惑っていることが分かった。

一方、日本では、教育特別区域として独自の小学校英語カリキュラムを開発してきた地域を中心に現地調査を行い、教員研修の実態や課題について把握した。その結果、研究開発学校、教育特別区域などで小学校英語を指導した経験を持っている教員は、すでに一定の力をつけていて、特区全体が一定のレベルの授業を行っている傾向がみられた。

（２）次に、日本と韓国の小学校教員への質問紙調査を分析した結果をまとめると以下のとおりである。

国際語としての小学校英語を教えるときに、教員の指導力にはどのような課題があり、どのような教員研修の充実が必要だろうか。本調査では、両国の小学校英語教員の能力・資質に注目する。両国の小学校教員がどのような能力と資質を持っているのか質問紙調査を通して把握した上で、それを小学校教員研修内容と関連づけて分析し、教員研修カリキュラムの開発を試みる。

調査は韓国と日本の小学校教員を対象に調査票配付（郵送法）による質問紙調査で行った。調査実施期間は、両国とも2012年11月から2013年1月の間である。質問紙は、韓国ではソウル市の公立小学校500校、日本では特区などで独自の実践を試みている18地域の630校に3部ずつ配付され、1,337名（韓国567名、日本770名）の教員が調査に応じてくれた（4割の回収率）。質問紙は、①教員の英語力、②外国語活動（韓国の場合、英語）の評価、③外国語活動を行う上で必要な条件、④英語研修、⑤教員の異文化意識・異文化間コミュニケーション能力、⑥小学校英語学習に関する意見などの110項目で構成された。

結果と考察

① 教員の英語力と研修について

まず、「小学校の英語指導に自信があるか」を尋ねた結果、韓国の教員の84.8%、日本の教員の27.2%が肯定的に答えた。これと関連して、「4技能別に英語力」を尋ねた結果をみると、4技能すべての項目において、韓国の教員の英語力が高い傾向である。特に差がみられる項目を韓日の調査対象者順にみると、発音（67.4%、8.7%）、英会話（97.5%、35%）、英作文（90.3%、23.5%）で、教員の英語力有無が「英語指導への自信」に影響を及ぼしているようである。

次に、両国の教員が「これまで受けてきた研修内容及びこれから希望する研修内容」について尋ねた結果は、表1、表２、表３のとおりである。両国とも「海外研修や異文化体験、英会話力」の研修希望が高いのは注目すべきことである。

＜表 1＞小学校英語に関する校内研修内容

	校内研修内容	
	韓国	日本
1	指導案	指導法
2	研究授業	研究授業
3	小学校英語の理念や目標	教材作成
4	評価	教室英語

＜表 2＞小学校英語に関する校外研修内容

	学校外研修内容	
	韓国	日本
1	指導法	指導法
2	教室英語	小学校英語の理念や目標
3	英会話力	研究授業
4	研究授業	教室英語

＜表 3＞小学校英語に関する希望研修内容

	希望する研修内容	
	韓国	日本
1	海外研修	指導法
2	異文化体験	海外研修、異文化体験
3	英会話力	
4	指導法	英会話力

② 小学校英語学習への意見について

教員からみた「児童が楽しむ英語活動」は、両国とも①「英語の音やリズムに触れたり、ゲームなどの活動」、②「外国人との交流活動」、③「異文化理解活動」の順で 90%以上の割合を占めている。また、「英語授業を受けた児童の変化」については、両国とも①「外国語に慣れ親しんだ」、②「外国人に対して物怖じしなくなった」、③「外国語や異文化への興味が増えた」の順で高い割合を占めている。特に、10%以上の差がみられる項目を韓日の調査対象者順にみると、「日常的に英語を使おうとしている（80.4%、42.9%）」、「英語の基礎が身についた（88%、56.7%）」、「多様な見方や考え方（58%、33%）」、「発音・語彙（87.5%、72.8%）」である。両国の小学校英語の導入の仕方が異なっても、教員の小学校英語への評価はそれほど変わらないが、英語の 4 技能と関わる部分では温度差がみられる。

最後に、小学校英語学習についての意見を検討すると、韓国は「小学校中学年（54.9%）から、週 2～3 時間（87.5%）、アルファベットの読み書きは小学校英語学習開始から（70.9%）」の実施に、日本は「小学校低学年（67.3%）から、週 1 時間（73.7%）、小学校高学年（53.7%）」の実施に一番割合が高い。英語の指導者については、両国とも、①英語の専科の教員、②ALT や外部の協力者、③ALT と担任とのチームティーチング（ALT が主導）が望ましいと考えている。「学級担任が中心になって指導するのが望ましい」という意見は両国とも一番割合が低い。小学校英語カリキュラムの今後の方向性を決めるに役立ってほしいものである。

（3）言語村の元祖であるアメリカミネソタ州の「Concordia Language Villages」を訪問（2013 年 8 月）し、現地調査を行った。

夏の期間に 2 週間に渡って集中的に行われるプログラムは「Concordia Language Villages」の一番メインのプログラムである。

このプログラムでは、外国語学習より異文化学習の比重が高く、「楽しく早く外国語を習得する」ことがねらいとされていた。

プログラムに参加した高校生にインタビュー調査を実施した結果、2 週間プログラムに参加すると、高校の単位に認定されるメリットもあるが、単位とは関係なく、多様な外国語プログラムに参加したい希望を持っていて、満足度が高かった。また、機会があれば、夏プログラムの先生として参加したいと希望していた。「Concordia Language Villages」は地域と一体化した外国語を楽しく学べる生涯学習の場の役割を果たしていた。日本より日本的な日本村、韓国より韓国的な韓国村は、大変興味深い。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
金　ヒョンスク「小学校英語カリキュラムの特徴とその影響に関する実証的研究」『JASTE 研究紀要』日本児童英語教育学会、査読有、第 31 号、2012、87－98 頁

〔学会発表〕（計 2 件）
① 金　ヒョンスク「日本と韓国の小学校英語カリキュラムの特徴とその影響に関する研究－中学生への質問紙調査に基づいて－」小学校英語教育学会（第 13 回）、2013 年 7 月 15 日、琉球大学
② 金　ヒョンスク 「日本と韓国の小学校教員の英語学習認識度に関する実証的研究」日本カリキュラム学会（第 22 回）2013 年 7 月 6 日、上越教育大学

〔図書〕（計 1 件）
金ヒョンスク他、協同出版、「小学校外国語カリキュラム」田中統治編著『学校教育のカリキュラムと方法』、2013 年、109－122 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
金　ヒョンスク（KIM, Hyun-sook）
聖徳大学・児童学部・講師
研究者番号：90524877

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：